

第9回 池田弘一神田外語大学名誉教授・ミレニアムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



外国語の教育機関である、神田外語学院、そして神田外語大学では、日本文化の教育にも力を入れてきました。「日本文化を理解してこそ、真の国際理解ができる」。佐野学園の歴代理事長にはそんな思いがあったからです。半世紀にわたり、佐野学園の日本文化教育において、中心的な役割を果たしてきた神田外語大学ミレニアムハウス館長の池田弘一名誉教授に、学院や大学の草創期の様子、そしてミレニアムハウスの意義などについてお聞きしました。

うちの親父は品川にあった明電舎というメーカーで働いていました。僕が昭和4（1929）年生まれだから、戦前のことです。歌舞伎と落語、講談が好きな親父で、僕が小学校に上がる前から月に1度は浅草の観音様のお参りと寄席に連れて行ってくれました。幼い頃、僕は近所の職人さんをつかまえて、「おじさん、中山安兵衛のお話してあげようか」って言った覚えがあるんです（※1）。その頃からおしゃべりになったんだ。

中学は東京府立第八中学校に行って、1、2年は謡曲部に入って謡いの稽古をして、昭和19（1944）年に3年生になると学徒動員で工場で働いた（※2）。小学校のときに教わった先生の影響で掃除が大好きだったから、誰よりも早く行って、テーブルの上を片付けておく。ちょこっと片付けるだけ。で、工員さんが来ると「おはようございます！」って挨拶をする。すると、「おっ、片付けてくれたのか、ありがとう」って、そこから1日が始まるんです。



工場では60円以上の給料が出たんですよ。25円は現金支給で、残りは強制貯金。親父に給料袋を渡すと、袋に判子を押して、そのまま渡してくれる。お金は「持ってな」と言うだけ。貯金しろとも、使えってことでもない。だから有効利用しましたよ。封切りの映画が99銭。25円あればいろいろとできました。本来は学生だけで映画館なんて行っちゃいけないんだけど、戦争で制限が緩んじゃった。歌舞伎に講談、落語に映画をもう観まくりましたね。

うちの母親も細かいことは何も言わなかった。住んでいた大田区の借家が空襲に遭って焼け出されたのが昭和20（1945）年4月15日。でも、5月5日には新宿で落語と映画を観ている。何か言われた覚えはまるでない。ただ、大学生のとき、夏の暑い日に扇子を持ってアルバイトに出かけようとしたら、「人様が働いている前で扇子を使うのはいけないよ」と言われました。ただひとつの教訓です。そのひとつ守っていたら、人生うまくいくんです。（1/11）

1. 中山安兵衛：後の堀部安兵衛。「忠臣蔵」の赤穂浪士のひとり。剣の達人。
2. 学徒動員：日中戦争以後、学生・生徒も工場で強制的に労働をさせられた。

第9回 池田弘一 神田外語大学名誉教授・ミレニアムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**先生、もう少し待っててくれませんか。
きっと、生徒は来ますから。**

戦争が終わり、早稲田大学の教育学部を卒業して、中学校の国語科の教員になりました。

当時はまだ、戦後の混乱期でした。父親が戦地から帰ってこない子なんてざらにいたし、母親が再婚すればそれはそれで家に居づらい。僕は早くに家を建てられたから日曜日になると子どもたちが遊びに来た。昼時になるとご飯をごちそうしなくちゃいけない。でも、うちだって余裕なんてありません。昼前になると父親がずっと家を出て、となり駅の質屋に行って金を用立ててくる。そのお金で、そば屋に寄って出前を頼んで届けさせる。僕は父親がそんなことをしてくれているなんて知らないから、「お前ら食べる」って、いい気なもんですよ。数十年後に僕が家を建て直したとき、生徒たちが新築祝いを持ってきてくれた。お祝いの品は仏壇ですよ。生徒たちには「僕たちは先生に世話になった覚えはありませんが、お父様には大変お世話になりました」と言われました。子どもは大人よりも物事をしっかりと見ているんですよ。





その後、高校の教員となり、勤めていた高校が全国で初めての高専、工業高等専門学校になりました。もともと、日曜日も自宅で学習塾をやったり予備校で教えていました。働いていた工業高校が高専になったことで僕の立場も国語科の教諭から助教授となり、研究日を週に1日もらえて、平日でも予備校で教えられるようになった。そんな時に、第八中学校時代の恩師である漢文の舞田先生が、神田の予備校で国語を教えることになりました。先生には可愛がられていたから、一緒に教えようと誘っていただきました。その神田の予備校というのが、後の神田外語学院だったんです。学院は最初、予備校としてスタートしたんです。昭和37（1962）年の頃ですね。

最初の頃は、何しろ学生がいなかった。あるとき、ちょっと早く学校に着くとシャッターが開いていない。すると、佐野公一先生がいらっしゃって、鍵を開けてくださった。冬でしたね。寒かった。だるまストーブに火を点けてね。授業が始まる時間になっても生徒は誰も来ない。で、僕は帰りたくなる。神田だから、寄席や芝居に行きたくなっちゃう。そうすると、公一先生は「先生、もう少し待っててやってくださいませ。きっと来ますから」とおっしゃるんです。あの方は顔つきが怖くって、みんな怖がっていたけど、本当は優しかった。そのうち、ようやく学生が来始める。それまでの間、公一先生は僕の話相手になってくださった。その優しさに僕は感動しましたね。（2/11）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第9回 池田弘一 神田外語大学名誉教授・ミレニアムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる



**会社が終わってからも遅刻しないよう
地の利のよい山手線の神田に学校を創った。**

公一先生は厳しくて、怒ると「お前、明日から来なくていい」と怒鳴りつけたこともあったそうだ。きく枝先生は、よく気が付いて、優しい方だった。でも、当時の職員たちは、「公一先生は顔が怖くて、言葉づかいも怖いときがあるけれど、実は優しい。きく枝先生は優しいけれど、本当は怖い」と言っていましたね。職員に対するけじめについては、きく枝先生のほうが厳しかったのかもしれない。

確かに、当時の僕はとにかく働きまくっていましたよ。高専では国語科の教員は上級学年の担任は持てないから、卒業生を送り出すことはできない。それはつまらないけど、その分、時間の融通がきく。こんな時期もありました。まず、鶴見の予備校で朝の9時から1コマ教えて、電車に飛び乗って川崎に行く。川崎の予備校で1コマやるとお昼になる。校舎を飛び出して、横須賀線に乗る。乗る前にサンドイッチをひとつ買う。それを電車の中で食べると、午後1時から始まる神田の授業に間に合う。2コマやると夕方になるので、銭湯に行ってさっぱりしてくる。夜にまた1コマ。1日に10時間ぐらいしゃべりまくる。やってできないことじゃない。

公一先生は、学期の始めには講師をみんな呼んで、きちんとした料理屋でごちそうをしてくださった。そしていつもこう言うんです。「先生、きっと『来ていてよかった』と思ってもらえる学校にしますから」とね。それに、あれだけ学生が少なかったのに、決して給料が遅配されることはなかったですよ。



公一先生には時々、注意もされました。「先生はいろんなことをよく知っているね」と言われることがある。これが注意なんですよ。褒めているように聞こえるけれど、僕には「無駄が多い」と指摘されたと思える。いろんなことを言い過ぎる。もっと肝心なことを言わなきゃいけないということです。公一先生には、そんな言葉で注意していただきました。

神田という場所に学校を創ったのは、地の利のよさからです。これも公一先生のお考えです。会社が終わってからも夜学の英語学校に勉強しに来る子たちがいる。そういう子たちが遅刻しないで来られる駅。都電やバスで行くような場所じゃダメだ。やっぱり山手線がいい。国電なら電車賃も安い。公一先生にはそういう心の優しさがあった。(3/11)

第9回 池田弘二 神田外語大学名誉教授・ミレニアムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**外国語を話すには日本文化を学ぶ必要がある。
日本人なりの「日本英語」があってもいい。**

予備校を1年ほどやってから英語学校だけにすることになりました。英語学校になっても、僕の講座を作ってくれたから居座りました。実は、公一先生も、きく枝先生も、外国語を話すには日本文化を学ぶ必要があると考えておいででした。

なぜ日本文化を学ぶ必要があるのか。いくら外国語を覚えても、自分の中に伝えるべきことがなければ会話なんて成立しません。逆に、外国人が興味を持つ話題を持っていれば、コミュニケーションなんてすぐに生まれる。その最たるものが文化です。僕たちは生まれてからずっと日本文化に接している。でも、日本文化をまったく知らない外国人に説明するにはきちっと学ばなくちゃいけない。国際人を育てる外語学校だからこそ日本文化を学ぶべき、それが基本方針にあった。

それと、日本人が話す英語は日本人から出てくるものです。公一先生は、「イギリス英語、アメリカ英語があるように、日本人のための『日本英語』というものがあってもいいじゃないか」とおっしゃっていました。「語学教育はサル真似ではいけない。国の社会や文化と密接に結びついているはずだ」と。日本人には日本人なりの英語の捉え方があり、その捉え方を習得するためには、外国語を学ぶことと同じくらい、日本の文化やマナーをしっかりと学ばなければいかんということです。





だから、公一先生、きく枝先生は、国語教員の僕に学院で教えることがあると思われたのでしょうか。幼い頃から伝統芸能に親しみ、知識だけではなく、感覚的に日本文化を理解していると評価していただいたように思えます。

授業の名前は『文学と教養』。僕は成績のいいクラスだけを教えていた。それと美人がいたほうがいい。当時は、英文秘書科とスチュワーデス科ですよ。僕が書いた文学史の本をテキストに教えるんだけど、芝居の話をしたり、落語の話をしたりと、まあ、もちろん教科書通りにはならない。授業が終わると、「今から歌舞伎座に行くと梅幸が『紅葉狩』を踊る時間だけど、誰か行くかい？」って聞く。すると、ソロソロと歌舞伎座の立見まで付いて来る子たちがいる。「揚げ饅頭って食べたことある？ないって？じゃあ食いに行こう」と、みんなで連雀町まで行ったこともある。思い立ったら行っちゃうんです。(4/11)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第9回 池田弘一 神田外語大学名誉教授・ミレニウムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる



**まあ、大学で教えるんだから
また助教授からやり直すのもいいじゃない。**

僕は高専で教えながら、神田外語学院にはずっと教えに来ていました。非常勤講師だったけど、日比谷公会堂で開かれた入学式の司会をやったこともあります。それに、きく枝先生の発案で、外国人講師の書き初めをやることになったときは指導もした。女性は振り袖、男性は紋付袴です。書き終わるとみんなで神田駅まで行進した。ずいぶんいい宣伝になったと思いますよ。

昭和60（1985）年になり、大学設立の準備も本格的になってきた。事務長だった佐野隆治会長に「池田先生、そろそろうちへ移ってこない？」と言っていただいた。即座に「あ、よろしくお願いします」と言っちゃった。その場で決めて、「理事にしていいただきたい」ともお願いしました。

大学の設置申請のときには「助教授で」と担当者に申し出た。僕は高専で10年間、教授でした。公立の高専だから大学でも教授の資格はある。でも、大学設置の申請で僕の役職を教授で出して、万が一引っかけたら大変なこと。だから、「どうぞ助教授で申請していただきたい」と申し出た。まあ、大学で教えるんだからまた助教授からやり直すのもいいじゃない。設立から4年過ぎれば、大学として完成するわけだから、そこで教授にしてもらえばいい。





幕張のキャンパスの土地は地盤を固めるのに通常の3倍の費用はかけていると聞きました。校舎も3階建て。これには僕も大賛成だった。高い建物から人を見下ろすのはあんまり好きじゃない。隆治会長は凝り性だから、校舎の外壁は滋賀県の信楽（しがらき）まで行って、畳2枚分ぐらいのサンプルで色の感じを見ながら色を決めた。だから建物の外観には統一感があるんです。僕は文字の揮毫（きごう）を任された。大学の正門にある「神田外語大学」の文字や、1号館エントランスに掲げられた「言葉は世界をつなぐ平和の礎」の文字を書かせていただいた。大きな和紙に書いたけど、壁一面になって驚いたねえ。大学の回りには何にもなかった。教室に行くとヘビやイヌがいるし、遮る建物もないから強風で校舎のガラスが割れたこともありましたよ。

受け持った授業は「芸能史」と「文学」。授業では義太夫のプロを呼んだ。女流義太夫の津賀寿（つがじゅ）も来た。後に芸術祭賞の文部大臣賞を獲った実力派ですよ。太夫も呼んだ。学生たちにもきちんと肩衣（かたぎぬ）を付けさせて、義太夫を学ばせた。僕の授業には、毎回ではないにしろ一流のプロを呼んで、学生たちには本物の日本文化を体験させましたよ。（5/11）

第9回 池田弘一 神田外語大学名誉教授・ミレニウムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



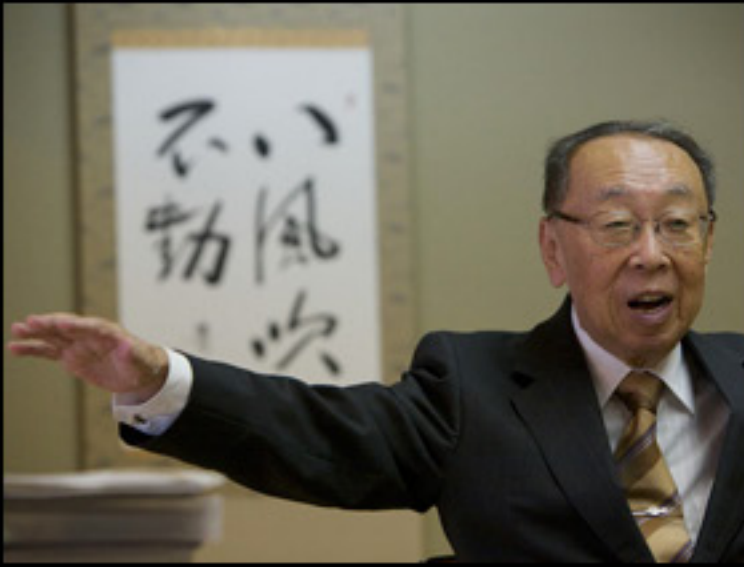
**火の手を見れば連中は集まります。
その後何が起こるかはご想像ください。**

神田外語大学が開学した年の夏のある日、佐野隆治会長から自宅に電話がかかってきました。神田の学院へ行ってみると、隆治会長は「池田先生、学生部長やってくれないか」とおっしゃった。学生部長はいましたが、辞めてしまった。その後釜というわけです。もちろん引き受けました。

当面の問題は浜風祭。第1回だから費用はすべて大学持ちだった。前の学生部長は「予算はいくらでもいいから、希望をどんどん出せ」と言って、辞めてしまった。学生たちはキャンプファイアをやって、真ん中にステージを作って、なんとかっていうロックバンドを呼んで、コンサートをしたいと言っている。僕は知識がないから「おお、そいつはおもしろえ。火は1カ所にしねえで、2カ所で対（つい）にするといい」なんてアドバイスをしていた。

僕は得意になって、教員の会議でもイベントの話をした。するとある先生が「池田さん、それ本気でやるつもりですか？」と聞いてきた。「本気ですよ」と答えると、その先生は「最近、船橋のイベントで暴走族が入ってきて大乱闘になったようですよ。ところで、警察には行きましたか？」と言うわけだ。



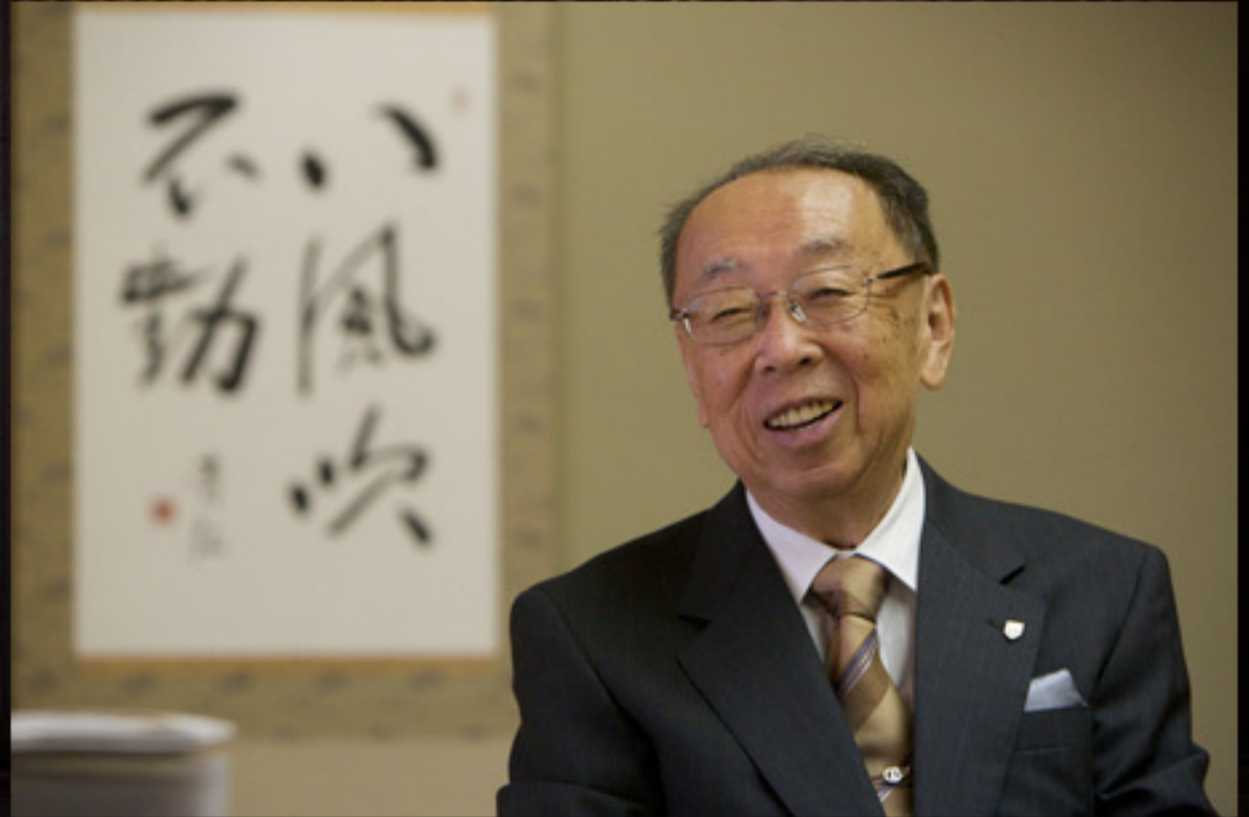


千葉西警察署に行って、キャンプファイアの話をした。対応した警察署の人は地図を広げてこう言った。「ここにきれいな道路ができました。この道路を中心に13の暴走族グループがあります。私たちはこれらのグループが衝突しないよう、日夜かけずり回っているわけです。おたくの大学でキャンプファイアをやるのは自由です。でも、その火の手を見れば、連中はみんな集まると思います。その後何が起きるかはご想像ください」結局、キャンプファイアを中止にしました。さんざん「好きなようにやれー」って言うておいて、今度は、学生たちを集めて、「やめろー」ですからね。学生たちには申し訳ないことをした。

で、浜風祭は前日から雨。大学の備品にテントがなかったら、町内会から借りてきた。なのに、誰もテントの設営方法を知らない。僕はもちろん知らない。やっと設営できたと思ったら、風でひっくり返って、借りてきたテントはドロドロですよ。おまけに学生たちは僕に黙って近くの商店街から協賛金を集めていた。僕は1軒1軒回って挨拶をして、大学の設立を快く思っていないご近所さんにも頭を下げて。まあ、ひとりでぐるぐる回りました。(6/11)

第9回 池田弘一神田外語大学名誉教授・ミレニウムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**きく枝先生に怒られたのは一度きりです。
ささいなことへの気配りの大切さを教わりました。**

大学が開学して、初めて出来たクラブは茶道部です。当時は川向こうの公民館で活動をしていた。あるとき、佐野きく枝先生が見学に来られた。きく枝先生は「学生たちがあれだけ一生懸命やっているんだから、私100万円を寄付しようと思うの」と言われた。僕は泡を食って「それは止めてください。ひとつの部だけなんかそんなことをしたらまずいです。後日、学生部長の私から『理事長、クラブ活動の支援をお願いします』と申し入れをしますので、どうぞ今はなさらないでください」となんとか止めてもらいました。きく枝先生は熱心で、思うとすぐに行動に移そうとされる方でした。

佐野公一先生は、昭和53（1978）年の夏に、大学の予定地を視察に来て、その場で倒れられました。ご命日は10月18日です。僕はご命日には静岡県の富士霊園にある公一先生のお墓をお参りしています。大学が開学した年には、佐野きく枝先生と一緒に参りに行きました。お墓の前で、きく枝先生がお経を唱えてらっしゃって、僕は先生の後ろに立って拝んでいた。すると、涙がどくどく出てきて、そのうち大声を出してわーって泣き出してしまった。自分でも何が何だか分からない。きく枝先生は「お父さんが『池田先生が来てくれた』ってとっても喜んでいる」とおっしゃってくださいました。



お墓参りにご一緒させていただいて、その後すぐに、きく枝先生は具合が悪くなって入院されました。11月になって、浜風祭のパンフレットができたので病院にお届けしました。きく枝先生は、届けられたパンフレットじっくりとご覧になって、「よくできました」と大学に電話をかけようとしたら、電話番号が載っていない。で、怒られました。きく枝先生に怒られたのは、後にも先にもその一度きりです。すぐに大学の事務局の方と謝りに行ったら、「ご苦労さま」というだけで、もう何もおっしゃらない。その時に、ささいなことにも気を配らなきゃいけないってことをきく枝先生から改めて教わりました。

そして、年が明けた昭和63（1988）年1月11日に佐野きく枝先生はお亡くなりになりました。告別式の前に、内輪で集まって、きく枝先生のお別れ会をしました。そのときにきく枝先生の「お別れの言葉」を読み上げた。きく枝先生がみんなに感謝の言葉を残したメモのようなものがあったので、それをちょっとだけ、私が整えた。みんな涙を流しましたよ。（7/11）

第9回 池田弘一 神田外語大学名誉教授・ミレニアムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**僕は教員。とにかくしゃべりまくるから、
取れるものがあれば持っていけばいい。**

なにしろ大学が出来た頃はみんな不慣れだった。開学に合わせて集まってきた先生方のなかには、自分の所属してきた大学で教授をしていた人もいるから、「大学というのはこういうものである」という考えを持っていた。一方で、神田外語学院育ちの職員たちは、正直言って大学の運営なんて分からない。他の大学の事務局から転職された方もいたけど、その人たちだって大学の開学に立ち会った経験なんてない。

大学は開学からの4年間で、卒業生を出して初めて完成となる。それまでは教員も変更できない。当時の佐野隆治会長のご苦労は大変なものだった。要するに我慢ですよ。ご自分にはきちんとした考えがあって大学を創った。やりたい方針も決まっている。でも、年配の教授陣を怒らせるわけにはいかない。僕なんか怒らせちゃう口だから。ある先生が「私の誉れある体験に基づくと……」などと言いやがった。だから、僕はその先生のそばへ行って、「先生、恐れ入りますが、先生の誉れある体験を捨てる勇気をお持ちください」と言いました。その先生、真っ赤な顔をしていましたよ。でも、僕は別にその先生に雇われているわけじゃない。部下だとも思っていないから、平気でそんなことも言えた。





僕は何にも貢献なんかしていませんよ。でも、事務局がうまくいくように、ただそれだけを心がけてきました。大学が開学した頃は、職員に威張る教員がいた。年寄りならまだ許せるけど、若いのにずけずけものを言いつける奴がいる。僕は、事務局に何か文句を言ってくる教員がいたら、うなりをあげて、刃向かった。「てめえ、やるか？」って感じで。長唄だって65年続けていますから声だけは出る。でっかい声出して、タンカが切れますよ。論理的なことはダメよ。論理的なこと言われたら頭がこんがらがっちゃいますね。とにかく、隆治会長もずいぶんと我慢された。そして、あの時代をくぐり抜けた事務局の職員は強いんですよ。

僕は今でも「教員です」とは言うけど、「教育者です」なんてことは言いません。学者でもなきゃ、研究者でもない。教員です。教育機関に勤務して、お給料をいただいている人間。だから知識を伝えるためにしゃべる。100も200も、1000も2000もしゃべるから、ひとつでも、ふたつでも取れるものあったら、持ってけと。50持っていったって、追徴金は取らない。僕から持っていった知識に、また自分なりの考えを付け足してくればいい。(8/11)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第9回 池田弘一 神田外語大学名誉教授・ミレニアムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる



**必ず「神田外語大学」ってのを言ってもらった。
とにかく繰り返し。そして根気ですな。**

大学は毎年、論文をまとめた「紀要」を出さなくちゃいけない。ところが最初の頃は書き手が少なかった。だから、僕は長唄の考察を1曲ずつ書いていった。1曲の考察を書くと抜き刷りを1000部ほど印刷する。それを各大学の邦楽の研究者や古典芸能の関係者、長唄の唄うたい、三味線弾きなどに配った。そうするうちに、義太夫協会、長唄協会、常磐津協会の人たちも僕を知るわけですよ。神田外語大学には変わった奴がいるってことが分かる（※3）。

平成19（2007）年に、長唄東唄会の創立50周年記念の演奏会で山田耕祐さんが編曲した長唄交響曲『鶴亀』を演奏した。そのときには、天皇、皇后両陛下のご進講の大役を仰せつかりました。ご先導役と解説の両方をさせていただいた。僕にもよく分からないんだけど、その大役が回ってきたんですよ。僕はずっと幸運に恵まれています。幸せの運がついてるんですよ。

僕はいつも「『神田外語大学』名誉教授の池田弘一」と紹介してもらっている。名誉教授はどうでもいい。神田外語大学の名前が出るのが大事。NHKの『ラジオ深夜便』の『邦楽夜話』も7年間出演しましたが、必ず神田外語大学ってのを言ってもらった。それも番組の始まりと終わりだけじゃダメ。途中でも2、3回言ってもらわないと。アナウンサーの宇田川清江さんはちゃんと言ってくれた。あの番組は全国放送だからね。7年間続けりゃ知ってもらえる。地方に講演に行ったときも、「あっ深夜便の池田さんですか。神田外語大学ですよ」と言ってくれる。とにかく繰り返し、そして根気ですな。





学生部長をしていた頃は、千葉県を中心に高等学校50校以上を回りました。そのうちの半分は、かみさんの運転です。うちのかみさんも神田外語大学のことだが大好きだから。訪問する前は、まず、巻き紙に筆で手紙を書いて予約を取る。やっぱ人は驚かさなきゃ。2時間くらい話をし、1日に2校、3校回る。神田外語大学を印象づける。それに、自分ががんばったから、それで結果が出るなんて思わなきゃいい。成果なんて望まなくていい。だって、悪い結果も、結果でしょ。自分で完成するなんて思わなくていいし、重荷を背負わなくていい。胸が詰まって晩酌ができないようじゃ困りますよ。(9/11)

3. 紀要に掲載された長唄の論文のうち14曲分は『長唄びいき』として平成14(2002)年に青蛙房から出版された。

第9回 池田弘一 神田外語大学名誉教授・ミレニアムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**世界中から風が吹いてくる。
そうでなきゃ、おもしろくない。**

神田外語大学は、設立時から日本文化の学びを大切にしようという考えがありました。きく枝先生はもちろん、佐野隆治会長もその想いが強かった。神田外語大学は日本にある外国語大学なんだと。ここで学ぶ学生は、日本のことをきちんと理解してから外国に行くという考えが設立のときからあった。

平成12（2000）年に僕は70歳の定年を迎えることになっていました。規約によって、教授職を辞任して、非常勤講師であと2年勤めるというのが普通でした。公一先生もきく枝先生もお亡くなりになり、佐野隆治会長が理事長を務められておられました。会長が「先生、どうするの？」とお聞きになるから、僕は「どうしようもないでしょ」って言ったんだ。だって、先々のことなんて何にも考えていないんだから。そうしたら、隆治会長は建物を建てようとおっしゃられた。そして、「先生、そこにいればいいじゃない」とおっしゃるから、僕は「いいですね」と答えた。伝統芸能などを上演できるホールと和室を作ることになった。それが「ミレニアムハウス」です。



ミレニアムハウスを設計する前に隆治会長と一緒に都内の劇場を見て回りました。とにかく使い勝手のよいホールにしようと思った。僕は幼い頃から寄席や芝居を観続けてきたし、楽屋裏もよく知っている。劇場によっては収納場所がなかったり、トイレの場所がとんでもないところにある。設計者の印象だけで作ってしまって、使い勝手を考えていない。ミレニアムハウスの舞台は奥行きがたっぷりあってある。幕を舞台の後ろに幕をひとつ下ろせばその裏を人が通れる。それぐらい広い舞台はなかなかありませんよ。



和室は、『八風居（はっふうきょ）』と名付け、三味線や琴、書道の教室を開いています。『八風吹不動（八風吹けども動かず）』というのは元々、禅の言葉。不動の精神の尊さを説いている。神田外語大学は国際的なことを学ぶ場所だから世界中から風が吹いてくる。そうでなきゃ、おもしろくない。教員も、学生も、その風が吹く中で、「動くこととはどういうことか」「動かないこととはどういうことか」を考えるのがいい。動かずに、みんなで同じ方向ばかり見ていたら、戦中の大政翼賛会みたいになってしまう。僕は志なんて持ったこともない。人はちょっと偉くなると、他人を働かせようとする。でも、真の意味で人のために働こうとするのはお金もなければ、権力もない人ですよ。八風居はある意味での道場。ここで世界から吹く風と自分を見つめてほしい。

(10/11)

第9回 池田弘一 神田外語大学名誉教授・ミレニウムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**分かってほしかったら一生懸命伝える。
話そうとすれば、100年の人生困りませんよ。**

大学が始まる少し前、「俺は教員でよかったのかなあ」と思っていた時期がありました。こんな風にしゃべっていていいのかと。すると、高専の教え子に「先生からしゃべるのを取ったら何が残るんですか」と言われた。ハッとしましたよ。「先生みたいなわがままな人がね、呑み屋の親父になったら、すぐに客と喧嘩をして潰れるに決まっている。しゃべるのを取ったら何が残るんだ」ってその教え子は言うわけですよ。その時から、教え子ってのは、「教えた子」じゃなくて、「教えてくれる子」だと思えるようになりました。

学生も、職員も、みんな自分の好きな道を歩めばいい。自分の方向性を自分で決めりゃいい。他人にさせられていちゃしょうがねえ。「自由」は、「自らに由る」と書く。どんな原因も結果もすべて間違いなく自分にある。気ままにやっていいという意味じゃない。それと、自分が決めたことにはマメじゃなくちゃいけない。息子が大学浪人をしていたとき、三井物産の会長をしていた水上達三さんとゴルフをご一緒することがあった。色紙を持って行って、お言葉をお願いすると、「忍耐」って書いてくださった。水上さんは、渡してくださりながら、「忍耐ですけど、鋭く忍耐です」とおっしゃった。休んでいるんだか、考えているんだか分かんないような忍耐じゃダメなんです。



「僕の気持ちを分かってくれない」と言う奴がいる。そんなの分かるわけない。分かってほしかったら一生懸命伝える。話すなり、行動するなりして、根気よく話せ。何も話さないで、「あいつらは理解してくれない」って言ってるだけだったら、これはおしまいです。伝えたいことがあれば、相手のところまで出かけて行って話せばいい。そうしたら、100年ぐらいの人生、困らないで過ごせますよ。(11/11)

池田 弘一 (いけだこういち)

昭和4 (1929) 年、東京に生まれる。早稲田大学教育学部国語国文科卒業した昭和26 (1951) 年、中学校の教諭になる。神田外語学院の草創期から講師として日本文化を教えてきた。昭和60 (1985) 年に学校法人佐野学園の理事に就任。昭和62 (1987) 年に都立工業高等専門学校教授として公立学校の教員を退職。同年、神田外語大学開学にともない助教授に就任。平成12 (2000) 年に教授として定年退職後、ミレニアムハウス館長に就任。平成13 (2001) 年より名誉教授。現在もミレニアムハウスで伝統芸能の公演を企画するとともに、敬語講座や書道教室を開き、日本文化の真髄を広く伝えている。

令和5(2023)年5月永眠。享年93歳。

本ページ内の写真はすべて神田外語大学名誉教授・
ミレニアムハウス館長 池田 弘一氏の提供によるものです。

撮影場所：国立演芸場 (独立行政法人 日本芸術文化振興会)



第9回 池田弘一神田外語大学名誉教授・ミレニアムハウス館長
日本を見つめ、世界の風を感じる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」